

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 0 1

氏名

稲辺みのり

美術館名
いくつでも

道立近代美術館、芸術の森、国立西洋美術館、
東京国立博物館

私の祖母と母は音楽をやっている、アートが好きだったので、幼少期の七歳から、
度々美術館に連れていかれることがありました。正直、小さい頃は絵を描く
ことは好きでも、油絵や日本画、工芸品などを見たところで「そりゃ楽しいと感じて
いたから」くらいに思っています。

そんな私が初めて楽しく、興味深々に鑑賞できたのが、道立現代美術館で開か
れた「XPRY・ブリア展」でした。私が小学生の七歳でした。私はピンクの色を使った、
かわいいモチーフの散りばめられた現実離れした世界観が好きだったので、もう、夢の
ように目をキラキラさせて作品を見たことを今でも覚えています。また、XPRY・ブリア
は「イグワラ・チャラワラ」の衣装・ドレスのデザインもしていたので、洋服が好きだった
私からしたらすごく憧れの存在に感じました。他人の作品に心をつかまされるのは初めてで、
とても衝撃的・刺激的で興奮していました。その感覚は今でも、自分の好きな作品・作家
に出会ったときに表れたりします。

高校生になり美術を本格的にやりたいと思うようになったので、その上で様々な作品を見るこ
とに大事だということを理解し、機会があれば美術館に行くようにしようと思うようになった
ました。実家が札幌だったので、道立近代美術館や芸術の森に行くことが多いです。
最近の展示で私が好きなのは、芸術の森で開催されている「月岡芳年展」です。

浮世絵の持つ独特な雰囲気はもともと好きだったので、月岡芳年は浮世絵文化と晩
年の作家なので新しい近代美術的な要素も加わっていて更に今では新鮮に感じ
ました。浮世絵で使われている色って、たいてい限られた中で使われているイメージ
なのですが、芳年は今までの色（レンインローや彩度の高いみどりや、セシワなど）を加えて使っ
て、また雨やけぶりなどを表現する線や形がかなりテラールされていて、おもしろくて
センスを感じました。いろいろチャラワラも登場していて、見ていてとても楽しかったです。

高校生の修学旅行では国立西洋美術館と東京国立博物館へ行きました。両方
合わせて回る時間が3時間しかなくて、全然見きれなかった苦い思い出があります。
意外だったのが博物館の方で、工芸品等ばかりかと思っていたら、たくさん絵画もあって、
またちっちゃい昔の生活品だったりがあったり、おもしろかったです。西洋美術館はさすが、見
たえがありました。知らない作家・作品があって、でもやっぱりとちらとも時間が足りな
かったので大学生のうちは何日かかけてゆっくり見に行きたいです。

他の人の絵を見るのは大好きなのですが、美術館鑑賞する上で「入り込み」があって、

(続けて裏面に書いても良いです)

“どこを見れば良いのかわからない”ということ。自分の好きな作品があるとつと目が
行って、素敵だなあって思、色の配置とか技法を探究するように見るのができて、
学びにも刺激にもなっています。ですが、どんなに有名な大作だとしても、自分の心
にワクワク来なかった作品だと、興味が湧かないというか、美術をしている人は様々な
作品を興味深く観しようとしているのに、その「美術の目」のようなのが自分には
全く無いようで辛くなってしまっていることがあります。そのときその場では、時には無理矢理
にでも絵をじっくり見て、吸収できる部分を採るのですが、すぐ忘れてしまいます。作品
も作者も記憶に残らないです。また何かで解決する音のような気がします。正直、
後に見返すことも無いんだと思います。ただ「美術が好きな人」としてならば、最初に
挙げた好きな作品に感動しているだけで良いと思うのですが、「美術を学ぶ人」としては
そのままだではいけない気がしているのです。周囲の美術を学んでいる人たちには、
好みではない絵でも一体どのくらいのレベルで気持ちを入れて見ているのか、どこを見て
いるのかかとしても気になってしまいます。例えば美術史の知識も有名な作家も
全くと言っていいほど私は知らなくて、美術の目もなくて、でも自ら学ぼうとする意欲が
湧いてきません。皆それらができていて、恥ずかしくて、だから私も…と思うことはあるの
ですが、多分そのマインドではいけないんだと思います。まとめると、作品から学べる
ことは理解しているけど、私は美術をやっているにも関わらず、自分の好きな部分
以外の作品には本質的な興味が湧かず、そういった作品の見方もわからず、辛く
恥ずかしい気持ちになるということ。本当は幅広い作品を興味深く観しようする
目が欲しいんです。考えと感覚の矛盾が苦しいです。

これらのことにより、周囲との差から、私は本当に美術に向き合う気がないのだ
らうと思います。ですが私個人の考えとしては、自分の好きな部分を極めて知識が
少なかったとしても作品を制作しているだけで充分なんです。自分に何か足りない
と感じたとき、他の作品を見て参考にしてあげれば、その他ではたまたま作品に感動している
だけでも良いと思います。間違っているのなら、考え方の根本から知りたいてす…。
考えを整理してみると、私にとって美術館は「作品との出会いの場」そして時には
「学びの場」の1つと見興味がなくても良い出会いがあることがあるので私は美術館
へ行きます。これからも行きます。美術館へ行って、自分の「好きの幅」も広げられたい
良いと思います。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 0 3

氏名

姉崎 由奈

美術館名
いくつでも

北海道立近代美術館, 芸術の森美術館

一行目

私の記憶上、私が初めて行った美術館は北海道立近代美術館です。もう少し言えば、美術館自体よりもそこで当時やってた展覧会、「ガリバーの旅行記」を子供向けに、絵本のようにポップにアレンジしていた企画展が強く印象に残っています。私はもうそれをどこでやってたかを覚えていないからなのですが、母親によると近代美術館だったそうです。だから、最も強く焼き付けられた北海道立近代美術館が私にとっての初めての美術館です。

当時、私は恐らく幼稚園児でした。「ガリバーの旅行記」の展覧会については、10年以上も前のことなので、本当に印象深かったある一部屋しか覚えていません。その部屋の四面ある壁の内3面は黒く、残りの一面はガラス張りので外からまぶしいぐらいの光が入ってきていました。幼い私にとって、その部屋はとてつもなく、その広い中に2つの展示物がありました。一つは忘れてしまったのですが、もう一つは大きなゼリーゼンズで光が照り返っていて本当にきれいでした。それから、美術館内の掲示のどこどこにいた気のぬけたガリバーの顔も覚えることはできません。本当に、光のきれいな空間でした。これには私の思い出し補正のようなものが入り、美化されているのには間違いはないのですが、今でも絵画みたく私の心に残っています。有名でもなし、人がたくさん入るような展覧会でもなかったとは思いますが、きっとこれは私にとって一生で最も美しく、楽しい展覧会であるのだと思います。私は、そんな美術館を誰かに提供したい、という思いもあります。

もう一つ美術館に関連して印象深く残っているのはパウル・ケル-の絵本です。「ケル-の絵本」というのですが、これについては何の展覧会であったのか一際覚えていません。ただ、その展覧会の最後にあるショップで買った絵本なので、ケル-に関するものであったのかもしれません。これもまた幼稚園の頃であったと記憶しているのですが、家に帰って読んだこの絵本が当時の私にとって大きなショックを与えました。もしかすると、私に強い生死観を植え込んだのはこのときであったかもしれません。私には、恐怖の塊の本に思えたのですが、不思議と、怖いものほど人は見つめていたくなります。おそらく、この絵本は私が親に頼って買ってもらったと思うのですが、美術館に併設されているお店があれば私は勝手にパウル・ケル-

(続けて裏面に書いても良いです)

について考えることはありませんでした。今でも恐怖心はあるのですが、
パウルクレーの絵が好きになりました。好きになる機会を与えてくれた美術館
のお店は案外大切な出会いの場だったのだと思います。

私はいつも北海道立近代美術館と芸術の森美術館へよく行きます。
本州の美術館へは行ったことがないので、前回の授業を受け、本州の大きな
美術館へも行ってみたいと思いました。また、幼少期に美術館から受けた強い
メッセージを、一生忘れずにいたいです。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8204

松嶋 修幸

美術館名
いくつでも

札幌芸術の森美術館 野外美術館

2017年

岩合光昭写真展 THE CATSねこ科ねこは野生動物だ。

一行目

僕は高校2年生の7月、友人と札幌芸術の森野外美術館にて行われていた「岩合光昭写真展 THE CATSねこ科ねこは野生動物だ。」を見に行きました。(まずはじめに言いますが、僕はねこが大好きです。飼ってはいませんが大好きです。具体的にどの位好きかと言ったら、野良猫をみつけるとどこにも追いかけて人懐っこい野良猫と3,40分話しかけたいです。(それぐらいねこが大好きです。)

この写真展は、「ねこの橋」6点、「ねこの丘」16点、「ねこの森」44点、「ねこの家」40点、総勢106点のねこ、ネコ科動物の写真によって構成されています。ねこ好きにはたまりません。正直この写真展は芸術性はあまりありませんが、106枚の写真も展示会の主題であり、ねこが本来持っている躍動感溢れる野生味や愛らしさが良く出ていました。上にネコ科と書いている通りトラライオンなどの動物の写真もあり、全体を通して配置にも工夫されていて飽きか来なくとも良い写真展でした。

僕が見に行った日は、偶然にも運が悪く雨が降っていました。友人と地下鉄真駒内駅の改札前、10時に待ち合わせしていました。僕は寝坊してしまったので急いで行きました。夏の雨の日特有のじめじめとした空気と汗が頬をつたった感触を覚えています。僕だけかもしれませんが、美術館に行くという奇妙な感覚が残り、これは恐らくスポーツの大会に行く前、心の準備をするのと一緒に感じます。僕にとって、人の作品を見に行くということはどういふ心構えをしなくてはならないのです。感覚や集中のON、OFFが下手なので一日中作品から何か吸収しようという姿勢だったのかもしれませんが、先に今回の写真展には芸術性は無いと書きましたが、美術館に観に行くという行為は作品に芸術性があるか分からないが、行くだけで何かしら得る何か出来ると思ってしまう。僕がなぜこの課題を提出するに当たってこの写真展を選んだかと言え、単にねこが好きだということ伝える他に、美術館に観に行くことの意義を伝えたいからです。

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8205

横谷 梨穂

美術館名
いくつでも

トリックアート美術館 札幌芸術の森美術館 北海道近代美術館

一行目

私が記憶にあたる中で一番古い美術館の記憶は、小学3年生ごろの時に家族で行ったトリックアート美術館です。私は家族で出かけたことばかりなのでよく覚えていて記憶に残っています。入り口の所の裸婦画にどきまきしはから入って行ったことを覚えています。館内の床や壁はとどまらず、私たちに迫ってくる数々の作品たち。また、私たちが作品に近づいて写真に撮ってもらったことで一つ一つの作品がどきまきのようなもので、私や姉は美術館というよりアトラクション施設のように感じていたような気がします。当時の私のイメージにあたる絵は「かりで、もちろん絵の仕組みなどわかっていなかったのですが、「絵って意味がわからない」というイメージがあり、なるとなると苦手で意識がなりました。しかしトリックアート美術館での経験によりそのイメージが少し払拭され、「絵ってこんなものがあるんだ、面白いかも」と思うきっかけになったような気がします。アトラクションのように感じたのは、このようなイメージの変更があったからだと思います。今私は美術館に行っても勉強していますが、トリックアート美術館のような通常の美術館のイメージとは違う所に行った経験は勉強するうえでとても役に立つのではないかと今感じています。

また私が美術の道を目指すきっかけの大きな要素に漫画の存在があるのですが、それに関連して2013年に芸術の森美術館で開催された「大塚かいどうマンガ展」がとても印象に残っています。また「中学生のころ一人で遠出すること慣れずから美術館に行くだけでずく疲れてぼろぼろになってしまいました。

しかしこの美術館に入ってからはそんな疲れもふっと消えて楽になりました。荒川弘先生の「百姓貴族」「銀の匙」、板垣恵介先生の「グランド・ブレイク」が好きだったので、その生原稿にはしゃいたり、母の好きな「キャッチャー・イン・ザ・ライ」の原稿をみたか不思議な気持ちで眺めていたことを覚えています。大好きな漫画の原稿や当時の雑誌、情報に囲まれているのはただ単に楽しかったというだけで思い出しに思っているのですが、私はこの展覧会で漫画の表現の多様性によって衝撃を受けて、それが一番の思い出になりました。私は少年漫画ばかり読んでいたのですが、漫画は明か楽しいものという印象がありました。しかしこの展覧会で展示されていた作品の中には、少なからず当時の私にはどうも思えないものもありました。誰の、どの作品が私に衝撃を与えていた

(続けて裏面に書いても良いです)

のか、詳しくは覚えていないのですが、唯一覚えているのが市川春子先生の「虫と歌」でした。人型の虫と、その体液を顔にあびる少年の目、多数の虫がほばたき描写、なからかの線でもおもしろく登場人物に恐怖をなせか覚え、でも目が離せずにはいました。最近になり作品集を読んで「その恐怖の理由はあまりわかりませんでしたか」、漫画でこのような感情が得ることでできるといふのは当時の私にとってとても衝撃的なことでした。ただ単に内容だけでなく、絵柄、構図、色、タッチによってこんなにも印象が変わるのかと内容面と技術面、両方の表現の多様性、表現の深さを即と感じた展覧会でした。

27の美術館体験を思い出しながら書いて感じたのは、私にとって美術館、展覧会は違う世界のどき見ることのできる扉のようなものという事です。あのどき見て、気になつたら調べたらいいし、ひんとなかいたらそのままだでもいいという風に付き合おうと芸術を難しく考えすぎないで付き合っていけるのではないかと思いました。視野を広げるためにも美術館には積極的に行きたいと改めて思いました。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 0 6

酒井 李果

美術館名
いくつでも

春季書作展、書作展「墨響」、墨遊書展

一行目

まず始めに、私は美術館へ行くことがないため、代わりに書道展についての話についてしまうことをとわらせていただきます。

1つ目の「春季書作展」は今年のゴールデンウィーク中に行きました。五分校のうちの1つの旭川校の書道研究室が行っているもので、ため、同じ年目の人の作品も目撃しました。私が行ったときばかりと学生が書道パフォーマンスのように書く様子を見ることができ、紙の質感や筆の勢いや息が伝わってくるのと同時に、完成した作品をその場で来場者に批評していたというスタイルが個人的には斬新な印象を受けました。同じように書いている学生作品を見て、とても刺激を受けました。更に学びを深めていきたいと感じる良い機会だったと思います。

2つ目の「墨響」は今、私が所属している岩見沢校の書道研究室の卒業制作展です。高校生の時に訪れ、その表現力の高さと表現の幅に大きな衝撃を受けました。たくさん人の法帖の臨書作品や創作作品がばらばらとあって、自分もこんな作品を書けるようになりたいと強く思ったのを今でも覚えています。その人の作品を見てから来て先輩方と研究室をもとにしていこうと思うとまだ信じられない気持ちですが、たくさん人の知識と技を吸収していきたいと、頑張りたいです。また、学びながらもその中から自分の個性を見出して卒業展「墨響」で堂々と発表していきたい作品づくりをしていきたいと思っています。

3つ目の「墨遊書展」は学生だけではなく、大人の方が書いた作品がばらばらとありました。全体的に落ちついた作品が多く見られたという印象があります。しかし、落ちついた中でも潤滑の流れや筆質の美しさから作品の奥深さを感じることができ、とても勉強になりました。また、まじりのあふれだけではなく、深みをもたせる作品をつくってみたいと思っています。

この3つの書道展で学んだこと、感じたことはばらばらですが、共通して言えることは自分の手書きの練習と書への探求に繋がったということです。文頭に、美術館へ行ったことがないことを申しあげましたが、私は書とアートとの融合ができればいいなと最近考えています。書道はこの大学では美術専攻として位置づけられています。他のコースの人達と交流し、自分から書の色を加え、立体感を加え、デザイン性を加え、「書」という要素を含んだ美術館ができたら素敵だと思います。新しい考えではありますが、紙に墨で書くという従来の作品だけでなく、また違うアプローチの方法として、美術の力をかりて書への魅力を加えていけたらいいと思います。そしてその延長として、美術館にあり前に

(続けて裏面に書いても良いです)

書道の作品もばらんで欲しいです。「美術と書道」という新しいジャンルにおいて、相互的に魅力UP
につなげることを目指しています。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8207

高木梨帆

美術館名
いくつでも

北海道立近代美術館
(夢見フランス絵画展)

旭川道立美術館
(猫まつり展)

一行目

初めに、私はあまり美術館に行きません。デジタルの絵が好きなので、美術館で有名な画家の絵を見たり、絵描きさんの展覧会に行ったりは、18歳くらいから思っていました。その中で、私のその考えを変えた展覧会と作品の思い出を2つ書きます。その2つは高校の高文連の活動でしらべた行った美術館です。

＜北海道立近代美術館 - 夢見フランス絵画展 -＞ 2015年8月

9月、初めて行った美術館の展覧会です。全く美術に関する知識も無い、私には「連らぬるがまま行きました。近代美術館に行くのも初めてだったので、美術館の不思議な形を見て「札幌にこんな建物があったのか...」と驚きました。中には、展覧会に行くと有名な画家の名がずらり...と、言いたいのですが、全く興味がなかったのでもう覚えています。フランス絵画展は「フランスの写実的は女性の絵が中心。印象派の絵画は」と一冊にあった「モイズ・カスリグ」の「魚のあそび物」に目を奪われました。油絵で、ただ「魚」が机の上に浮かせられていて、魚の見えるところは質感が、暗い雰囲気の中で調子だ鮮やかな魚、おは「魚」という意外性には圧倒されました。私も作品が目立っていたと思ったのはこの時です。

＜旭川道立美術館 - 猫まつり展 -＞ 2017年10月

猫より犬派ですが、部活動で「猫」に行っていました。展覧会では世界各国の猫の絵や立体がありました。美術館は聖若し「イキ」でした。猫まつり展は年々「猫」の集まりが盛んです。特に好きなのは、「西誠人」の「申太郎」です。立体で木で作られており、猫が伸びている途中を再現されている作品でした。通りの21号車から1年1年、電報パズルで書かれた細長い作業とリズミクに整えられた。特に好きは部分で、猫の顔のほっぺや鼻の丸み、おでこと鼻の間の空きの曲線が本当にキレイで、吸い込まれたい気分と、今おでこに腫れや空きを撫でていた衝動に鳥肌が立ちました。全ての展示を見終ってから「猫も悪くない」と思いました。

おは、「凄...」と思ったのが、美術館の外に本物の生きている猫が自由に野放しされていたことです。この展示のためなのか、たまたま野良猫がたまっていたのかは分かりませんが、おは展示のためだったのならば、来場者の最高のポイントだと思えます。美術館の後は、何となく「猫」です。(「猫」の人の配慮を考えると違ふのかな)

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 0 8

横谷 かな

美術館名
いくつでも

道立近代美術館、札幌芸術の森美術館、後藤純男美術館

私は中学生の時に初めて美術館に行き、シャガール展を観賞しました。所属していた美術部の部員達と観賞しとても楽しかったのを覚えています。中学校の長期休暇の自由課題で「美術館に行って感想やレポートを書く」というものがあり、長期休暇には積極的に美術館に行きました。中学3年間でいくつかの展覧会を観ましたが、特に印象に残っているのは「アクアライン」という芸術の森で行われた展覧会です。インスタレーションや絵画、写真、彫刻など様々な方法で、タイトル「水」が表現されていました。表現が様々だったように、受ける印象も作品によって大きく異なっていました。山田良さんの「海抜ゼロメートル」という、廃材で組まれた階段の作品は、実際に上がってみると、海や水に対する不安感や恐怖のようなものが感じられました。一方、佐々木秀明さんの「栗を聴く」という作品からは水の優しさや神秘的なものを感じました。栗が落ちた時の波紋や、栗の落ちる様子が小さな展示室の壁や床に投影されていて、話すことも足音を立てることも遠慮してしまうような、静かで繊細な空間が広がっていました。水は地球の至る所にあり、場所や環境に合わせて姿形を変えていきます。そのような点で、水は自由の象徴のようだ」と考えるようになり、これをきっかけに、私は水というものを好きになりました。その後も、またあのワクワクを味わいたいと思い、積極的に展覧会へ行きました。特に記憶に残っているのはミュージア展、札幌国際芸術祭、藤戸竹喜さんの展覧会などです。また、高校生の時に授業の一環として行った、美瑛町の拓真館や、上富良野の後藤純男美術館も印象に残っています。藤戸竹喜さんの展覧会は「木彫が好きだから」という理由で観に行きましたが、他は特別な理由は無いまま観に行きました。ミュージア展では、アーノ・ヌーヴェーの曲線美を知ってミュージアを好きになり、国際芸術祭では現代アート面白さを知り、拓真館では初めて本当に魅力を感じる風景写真に出会い、後藤純男美術館では「繊細で美しいもの」というイメージを覆すような日本画の力強さを目の当たりにしました。面白い展覧会を観た後は必ず心の中で何らかの変化があり、そして「自分も人の心を動かせるような作品を作りたい」と考えます。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 0 9

氏名

吉野 萌美

美術館名
いくつでも

道立近代美術館、国立西洋美術館

一行目

元々美術館に行く機会が少なく、自分から足を運ぶことも少なかったのがあまり行かなくて無いです。その中から思い出されたこと書いていきたいと思います。

道立近代美術館は、私が美術部員だった川高文連の時に部員全員で行きました。この美術館は札幌付近に住んでいる人は誰も行ったことのある所ではないでしょうか。およそ2ヶ月周期で変わる特別展示と北海道で生まれ画家として活動している人の絵や札幌雪まつりのポスター、北海道で発掘された土器などの展示、永年常設展の2種類の展示があり、どちらも足を運ぶ程に見ごたえのあるものになっています。私が行った時、特別展示は「ホーラ美術館コレクション モネからピカソ、シャガールへ」というのをやっていた。これは私の初美術館体験になるのですが、作品のラインナップが若造の私でもわかるような有名どころばかりであり、素晴らしい物ばかりなのです。作品の隣には作者の生い立ちを合わせたキャプションが貼ってあるのですが、そこに書いてある文章は長く、とても丁寧ですが全てを読む気にもなえず、人の涙もあつたので流し読みをして通り過ぎていました。全体通して30分程で展示会場を出て、入り口ホールに戻ってきました。

その時には満足感や達成感、身に収まりきれない感動で疲れきっていました。しかし、また常設展を見ていなかたのです。初美術館体験「疲れたから見てこなかった、なんでもこれにはなりたいなかつたのでホールで10分程休憩し、常設展に挑みました。入って正面の絵は100号の、200号はなかつたと思います。壁にかくあの頃の私には大きく見えました。確かに大きい絵なのに、その絵はとても繊細に描かれています。おそらく新千歳空港の滑走路を描いたものなのですが、微かな景気による色の違いや自然の空気感を感じられる夕、少しもパースの狂いを許さない滑走路の正確さが細かい描写により、100号の大きな画面に存在していました。思わず入り口で立ち止まってしまいました。見れば見る程細かく、どこにも欠点が無いと思わせる完璧な夕、なかつたのです。その時は、「北海道にも私が知らなかった美しい世界が平面上に起こっている」ことをずっと考えていました。それ程絵に圧致されていたのですが、同時に今までの一歩でこんな空に至った。これ以上足を踏み入れてしまったら、振りかえなくなるのではと内心恐怖と興奮が渦巻いていました。案の定、展示に長くいる数々の作品に目を奪われ続け何度か足を運ぶ中、最終的には特別展示を見た時と同じように

(続けて裏面に書いても良いです)

ホールに駆け込んでいました。思っていたほど美術館見学は体力が必要だと気がか
さまよへ、30分後に生気を吸い取らねえかのよけ、その日はナイトに沈み込んでました。

その初美術館体験を今思い出して、広い空間に飾られている絵というのは、絵を叶
えたいだけでなくその展示方法も含めて「空間」を見ることも大事なのではないかと思
います。あの頃は理解しないうえ空間を見ていたのが、要い疲労の極まされたのだと解り
ました。

次に行った美術館は有名なところの西洋美術館でした。国立近代美術館とは違い、
館外にも展示が、あつたのが新鮮でした。ロタンの作品が並んで、大のこ寛えてしま
外に置いてあつたのは、その方が作品の魅力が引き出されるからでしょうが、私が見に行つた
日は文化の日で、常設展が無料公開されている日でした。時間の制限をあたつた特別
展は諦めたのですが、常設展にある作品が「又素晴らしいものはかりで無料で良いのかと」
ためう程度でした。入つてすぐ開けた場所には彫刻もあり、上に行くと宗教と関わり
深い絵が並んでいました。立体彫刻も描いて、そのから手面の大広がりも描いていると
もあり、見ている面白かったです。色々な作品が、あつた中、私が一番好きだったのが「睡蓮」で
した。この作品は私の作品制作で土台として「意識」の支えに与っているものです。

この絵は近くから見ると遠くから見方が綺麗に見えます。遠くから綺麗に見えるとい
うことは、絵の近々からでもその絵の魅力が見えるのです。一度は大勢の人だ。一度に、
一瞬不意くの人を魅了してしまつたのです。私にも大勢の人を魅了させる綺麗な
絵は描けるのか、描いてみたいと思つたのがこの時でした。なつて私の作品の根元
はこの絵を見るときに感情が残っているのです。

美術館に作品の空気に触れることによって、自分の個性が刺激され、作品の
質の向上につながる。なつて、なつて美術館に触れるとこり入足三連んでみたい
と思います。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 1 0

氏名

白谷 愛理沙

美術館名
いくつでも

酒田市美術館 (山形にあります)

一行目

私が初めて「美術」を身近なものと感じたのは、小学三年生のときに祖母に連れていってもらった酒田の美術館でのことだった。それ以前は、「美術」は特別なことか、老後の楽しみとしてしかとらえていなかった。祖母に連れられ、美術館の前に立ち、清潔感あふれる建物をつくりの夕日に照らされてきた。展示は、公募の油絵がずらりと並んでいて、今までとても魅力的に感じていた祖母の絵が、とてもその中では小さく、存在感の無いもののように思えた。それまでは私にとって祖母の描く絵が「美術」の中心で、その中心には頂点があったらいいと思っていたが、教科書の中ではない、実物の魅力や力強さや繊細さの溢れるそれ以外の作家の個性が生きた原画を観て、美術は「バーナーで炙くオリイ」を求めているのだと感じ、世界は広いなと思えた。たくさんのお客から受けた「イデヤ」や情熱も、「山形にしておきたい」と思え、帰った後に水彩絵の具を使って、椅子の絵を描いたのだから、自分のイメージした形や色がかいたにはできた作品は程よく絵を描くことの難しさを知った。絵を鑑賞する、ということは自分の想像力や「イデヤ」を刺激し、創作意欲につながると感じる。

また、その展示を見終えた後、何気なく出口付近の椅子に座っていたのだが、お手洗から戻ってきた祖母が「それ座、ちがいでしょ!」といきなり怒り始めた。不思議に思っ、腰を上げると、それは椅子でありながら椅子ではない、手すりもお、山形をした大木だった。大きなものを座、しました!と思っ、言い訳を考へていたら、右の横にある「どうもご自由にお願いします」という看板に気付いた。美術作品でありながら実用性のある作品、それは私にとってかけがえのないものであった。帰宅後インターネットで調べたらそれは「現代アート」というものの一つだと分かった。たしかに公園にある遊具のモニョメントも不思議に思っ、見ているが、それは生活の一部として、より人のそばにとけこんだ「美術」であると分かった。今まで自分とは遠いもののように感じていた「美術」が自分とも近いものだったという経験をしたのが、美術家の道路を歩むと思った。一番最近のま、かけがえのない

(続けて裏面に書いても良いです)

もしわかいと思ふか。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 1 1

藤本 悠平

美術館名
いくつでも

青森県立美術館、十和田市現代美術館

一行目

私の地元である青森県には、「青森県立美術館」と「十和田市現代美術館」という青森2大アートスポットがある。青森県立美術館は青森市にあり、青森出身の奈良美智や棟方志功の作品を展示している。一方で十和田市現代美術館は、青森市から約60km離れた十和田市にある。この美術館は青森出身アーティストに固執せず、草間彌生やオノ・ヨーコといった現代を代表するアーティストの作品が収蔵されている。

私が小学校1年生の時、青森県立美術館が開館した。何度訪れたのかわからない程度足を運んでいる。この美術館の良さは「落ちつく空間」であるという所だ。建物はレンガに白いペンを塗ったデザインで、青い空と緑の芝に映えている。また、館内で使われている文字のフォントは、この青森県立美術館のために作られたフォントで、駐車場やトイレ、コインロッカーやエレベーターの表示にまで用いられている。美術館にいたる間は、日常の世界とは別の空間にいたる気持ちになることができる。青森県立美術館に常設している作品で私が一番好きな作品は、2006年に奈良美智が制作した「Puff Marshie (プフ・マーシー)」だ。初めて見たときに一目惚れした。この作品がきっかけで、私が好きな美術作家の1人として奈良美智が加わることになった。奈良美智は青森県弘前市出身で、青森県立美術館には数多くの作品を残している。開館当初からこの美術館のシンボルである「あおもりけん」は奈良美智の作品だ。屋外に高さ8.5mの立体作品が展示されている。冬になると雪が積もり、帽子をかぶったような姿になり、季節によって数々の顔を見ることが出来る。また、ここ数年で有志により、パッチワークの帽子が作られ、秋から冬にかけてかぶるようになった。今年が開館12年目となるこの美術館を代表する作品だ。開館10周年の2016年には、以前からこの美術館にあった八角堂を改装し、奈良美智のブロンズ像の新作「Miss Forest (森の子)」が展示された。こちらも屋外展示のため四季によって姿を変える。私のおすすめは晴れた冬の日だ。一番美しい姿を見ることが出来る。常設展示でおすすめしたい作品がもう一つある。それはシャガールのアルコの舞台画だ。開館から全4幕のうち3幕を展示していた。しかし、2017年より4幕全てが展示されている。縦9m、横15mの舞台画は圧巻だ。力強い表現でありながらも落ちつきのあるこの舞台画は、青森県を訪れた際はぜひ見てほしい。

今年の5月3日から5日にかけて青森に帰省したときも、青森県立美術館へ行った。この時、企画展「シャガール 三次元の世界」展が行われていた。20世紀を代表するシャガールの絵画や陶器、石彫、ブロンズ像まで多種類の作品が展示されていた。特に興味を持った作品が、「ラ・バステュー」だ。赤と青を使ったこの作品は力強い表現の中にストーリーやメッセージを感じることができた。この展覧会は5月6日で終わってしまったが、前述のアルコの舞台画はこの美術館のコレクションとして通年観ることが出来る。シャガールの奥行きのある表現を鑑賞するには世界で1番の美術館であると思う。

(続けて裏面に書いても良いです)

続く →

続き。

次に十和田市現代美術館だ。この美術館は青森市から離れていることに加え、アクセスが悪いため2度しか行ったことがない。特徴としては、展示作品の全てが現代アートであるということだ。私からこの美術館の作品で一番好きなのは、矢野龍渓の「フラワー・ホース」だ。青い空、白い建物、緑の芝生の上にかわいらしい花で彩られた大きな馬が展示してある。街の明るさの1つになっていてとても美しい。また、この美術館は官庁街通りという大通りに面しており、十和田市一の桜の名所だ。よって春のフラワー・ホースはとても美しい。教育大の前期の面接でこのことを言った際、三橋先生に大変喜んでくれてとてもうれしかった。

十和田市現代美術館にも、奈良美智の作品がある。美術館の壁面には黒で「夜露死苦が-ル2012」という作品が描かれている。とてもインパクトが強く、印象に残っている。また、美術館向かいの公園には草間彌生をはじめ多数の作家の作品が野外展示されている。街のにぎわいの1つとしてアートが大きい役割を担っていることがよくわかる空間だった。

北海道に住み始めて2ヶ月がたつが、まだ北海道立近代美術館しか行ったことがない。アートであふれる北海道の様々な美術館を4年間でたくさん訪ねたい。青森では得られなかったアートの力を学んでいきたい。

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 1 2

安藤 美羽

美術館名
いくつでも

北海道立帯広美術館, 東京国立近代美術館

一行目

私が美術館と聞いて一番最初に思い出すのは私の地元、帯広にある北海道立帯広美術館です。そんなに小規模な美術館ではないかも知れないですが、時期によって色々の展示がされていて、私達の目と心を充分に楽しませてくれます。私はお母さんがよく帯広美術館での展示会を見つけてきてくれて、一緒に観に行きました。帯広美術館で一番覚えている展示会は、ムーミンの手がけた「トーハ・ヤンソン展」です。ムーミンは「グッス」なども多く、生活している中でよく目にするキャラクターですが、美術館で見ることでまた違った表情に見えるのは本当に不思議なことだと思います。その展示会では絵だけでなく、トーハが建てた小さな小屋「夏の家」も展示室内に再現されており、トーハが制作をしてきた場所が鮮明に分かるようにも工夫されていました。その展示会を観に行った時、私は中学3年生でした。実はいつ行ったかは忘れてしまっていて、トーハ・ヤンソン展のサイトで会期を調べると驚いてしまいました。とても鮮明な思い出として残っていたので、そんな前に行ったのかと驚いたのである。今思い返せば「高校の受験期真っ最中だったので行くか迷ったから最初に行かない」と親に言った様な気がします。今思い出してみると、美術館という場所は私達に大きな感動を与えてくれる場所になってくれるし、私達がそこでもらった感動は簡単には忘れられないんだな、と感じました。また、帯広美術館での展示会では「山下清展」もよく覚えています。この展示会へは昨年、高校3年生の時に行きました。山下清さんの生誕がよく説明されており、絵を描くということについて深く考えさせられました。その人について、1つの空間で深く知ること、考えることが出来るというところも美術館の良さだと思います。

北海道以外の美術館では、東京国立近代美術館へ行ったことがあります。そこへは、高校2年生の修学旅行での職場訪問で行く機会をもらいました。東京国立近代美術館で観た作品で、私がとても印象に残っている作品があります。展示がされている部屋に行くまでに積み上げられた段ボール箱があり、これから展示する作品が入っているのかな、と思ったり、それ自体が作品であるという説明を受けたのであります。私と

(続けて裏面に書いても良いです)

一緒に話を聞いていた同級生の皆も驚きを隠しきれず、積まれた段ボールがなぜ作品であるのかと疑問を口にしていました。この作品には私も考えさせられました。美術館に来た客がものを勝手に置いたら他の客が作品だと思っでじっくり見始めたという話もありますか。どこからが作品とよぶのか、ということには本当に難しい問題があるなと感じます。

そのような美術に対する疑問を新たに与えてくれ、また改めて考えさせてくれる場所もまた、美術館であるなと私は思います。

美術館に行けば、必ずとは言いませんが私達が展示から何かを受け取るという姿勢をとれば、いつも何か大きなものを与えてくれると思います。

美術を学んでいる人だけでなく、生き方や考え方に大きな影響を与えてくれる場になり得ると思っています。私も美術館に行く機会を作りたい、これからの人生に良い影響^響を与える体面^面をしていきたいな、と思っています。

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8213 浅野日和奈

美術館名
いくつでも

東京国立博物館、江戸東京博物館、両国相撲博物館、
北海道近代美術館

一行目

私の美術館体験という中で、私がここ何年かで印象に残った美術館について記述する。一番最近のものは、北海道近代美術館で行われていた棟方志功展を見に行った。受験の都合がわかり、とても晴々とした気持ちで、自由にしたいのある絵が沢山あったこともまた嬉しかった。最終日で混雑していたが、展示パネルの説明書きには、なほほどと思える情報があふれていて、特に「裸の女性の額の真ん中に丸を描けばそれだけでありがたい様になる」といった文句で作品をより楽しく見ることが出来た。版画も直立した状態では画面におさまらないうからと、体をくねらせて窮屈そうにしている姿が面白かったり、頭とお尻が同じ向きでこれもまた四角の中に無理やり詰めこんだような構図でいくら見ても飽きなかった。棟方志功は他にも出身地の青森の女性と、アートの女性の交流を絵にしていたり、アートの入りの構図、鉄砲をお花に変えたり独自のルールで描かれたものも99いかに、この二つの絵は予想以上に大きいものだったので驚いた。いつか私も棟方志功展の展示物や展示の順番を自分オ考えて借してみたい。

次に昨年上野の国立美術館のギリシア展を見に行った。大宮の父方の祖父母の家だったのでわざわざ行ったわけではなく、電車の広告でホースターを中心に描かれていた赤い体の男が、少し気になったから。人を惹きつける広告としては十分過ぎると思った。しかし、ギリシアと聞いても具体的な作品は解らなかつた。世界史の教科書で見たアテスやイーバといった都や、プラトンくらいしかわからなかつた。なんとなかギリシア神話に由来する飾りや石膏像が並んでいるのだろうと、想像だけで展覧会に足を運んだ。こんな気持ちで見ようというのは絵にたいして企画した人に対しては失礼かもしれないが、ただ一つ、ホースターで知った

(続けて裏面に書いても良いです)

裏面へ

あの印象的な「赤い男」が実際にはどういふ大きさで、どのような質感なのかを確かめることだけを目標に、入場券を買い、美術館の中に入った。ロッカーに荷物を入れ、混雑した人の流れに沿って、石膏像を見た。首から上の、よくデッサンに用いられるギリシア人。私は、興味が無かったので、その通りは素通りに近い早さで進んでしまっただが、その先に大きく構える何体もの石膏像を見て、私の考えは一掃されることになった。冷たい石とは思えぬ気迫、それは動いている最中で一瞬にして固められたような静止しているのに生き生きとした姿。私は思わず足を止め、それから他の客と同じように像の周りをぐるりと回った。どの角度から見ても自然な動き、その場に居合わせているような錯覚、二人の男のやり取りを間近で見物しているような臨場感が空間いっぱい広がっていた。

21世紀の3Dプリンタでも出力することの出来ない、はるか昔の人間の「手で造りこまれた産物を前にして、今度は自分がまるで動かない像のように数分間立ち止まればせう、実際には像の周りをうろついていた。

展示の中盤でようやく、「赤い男」の絵の前にやってきた。「源太のクロスコ画」というタイトルのその壁画は、両手に捕れたての魚を嬉しそうに持つ全身の赤い男が、高さ2mくらいの大きさで描かれていた。エジプトの壁画で体や顔のパーツは前を向いているのに、顔は正面を向いたまま、というのが面白い。それ似ているかと思ふ他に絵に入ったのは、二人の男が剣で戦っている姿が描かれているオレニシ色の壁。これもまた壁画のようになっていて、体が横向きだとなごやかなら。他にも、江戸の街並みや道具が再現された江戸車庫博物館や、21世紀の選定されている博物館について書かれた「自分の博物館」など、選定された博物館の歴史や、その博物館が思いの海が広がってきた

「源太のクロスコ画」
 ホッパの表紙
 だけあり、
 グッズもいろいろ
 出ている。
 私はキールを
 ↓買った。



提出日： 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 1 4

氏名

長井 千佳

美術館名
いくつでも

ホキ美術館 (千葉県)

一行目

私は二年前に、千葉県にあるホキ美術館に行った。ホキ美術館とは日本初の写実画家専門の美術館で、館内には、確かに、本物の写真と見間違える程精巧に描かれた絵画がたくさんあった。はじめ私は写実画というものに対して先入観を持っていた。絵を写真のように描くのならば、写真を撮った方が早いのではないかと。現実性を追求する写実画に、写真と異なる独自性は無いのだろうか。私は、ホキ美術館の絵画を実際に目にするまでは、ただ正確にものを描いた絵では感動しないだろうと思っていた。ギャラリーは、緩やかなカーブを描いた長い回廊を地下2階、地上1階に5本組み合わせ、一部30メートルは宙に浮いているという外観で、側には昭和の森という千葉市最大の公園と住宅地があり、美術館だけが千葉市の情景にはミスマッチだった。館内に入って一番最初に見たのは五味文彦氏の「木霊の囁き」で、深夜に森の奥へ入ったかのような絵だった。木の幹が光に照らされ、周囲の一切が漆黒の闇に覆われている中で、その大木はひっそりと佇んでいた。闇の中で光る木の葉の緑色は目にも鮮やかで、森の神秘性が感じられた。昼になって絵画と一担別れを告げてから、父と母と三人で軽食をとった。ミュージアムレストランのキッシュと果物のジュースは芸術的で挑戦的な味がした。他の料理もお薦めしたい。再び鑑賞をした。物音一つしない床を踏んで、30メートルの突き出た二階部分を歩いた。部屋の奥に、鳥の巣を描いた大きな絵があった。音声がスピーカーから自動的に流れ、その絵が描かれた経緯について説明してくれた。作者はある日、庭に鳥の巣が落ちているのを発見した。巣の中には小さな卵が二つ程あり、その光景は絵に描かれた通りである。ところが、翌日作者が再び庭に行ってみると、巣も卵も跡形もなく消えていたという。作者はその出来事に感動して、絵に描くことで鳥の巣を修復したのだ。私は、写実画の背景に様々な作者の感動があることに気付いた。写実画のリアリティーは、作者の思いを見る者に直に届けようとした結果だったのだ。究極の写実絵画は、その場にいない人にも触覚や嗅覚や味覚を与える魔法のような力を持っていた。ミュージアムを一回りすると、入口に戻ってくる。入口はショップで、展示作品がほぼすべてポストカードになって売られており、写実絵画グッズもある。パンフレットには、美術館は1日出入り自由と書かれているので、気の向くままに足を運び入れてみてはいかがだろうか。(10:00~17:30)

(続けて裏面に書いても良いです)

行ったことがあるMの知前

美術館や美術館展に関する自分の記憶、エピソード

感想

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 1 6

佐々木 梨乃

美術館名
いくつでも

原美術館、岡本太郎記念館、近代美術館、新国立東京美術館、
1 幸田舎庫(7751)

一行目

私は、小さい頃から絵や写真など美術や芸術に関わるものを見るのが好きで、色々お祭りや美術館での展示を見てきました。そして、私が本格的に美術を学ばたいという思いに至ったきっかけの一つの初めは、東京の品川区にある原美術館での蛸川美花の写真展です。母が蛸川美花の作品の展覧会を知って行ってもらったのですが、原美術館のあのおだやかな雰囲気のある美術館に入り、最初に目に入ってきたのは大きな写真のサイズに白い壁に貼られたカラフルな世界でした。カラフルで、鮮やかでとてもキレイなのにどこか闇を感じました。けれど、私にはそのカラフルな世界も闇を感じる世界観から目が離せなくて、夢中になり、とにかく好きでいた気持になりました。そこから影響を受けたのか、自分でもおそろい自覚はしていませんが、カラフルな世界を私自身の作品で作るようになった。なので、今思い返すと、あの原美術館での蛸川美花の写真展がなければ私自身全く違う作品を作っていたと思います。この展示会とは別に後に原美術館を調べたところ、1999年私の生れた年に私が大好きな映画監督であり、ミュージシャン、画家、作家でもあるヴァンセント・プラトも原美術館で個展を開催していたことを知り、このときほど自分は何物もともっと早く生かしてあげたのだとも思った時はありませんでした。そして、2つ目に岡本太郎記念館に行ったことがあります。これは、実際に岡本太郎が生きていた時の制作場所であり、家でもあったため、展示されている作品にもものすごく説得力のあるものを強く感じることができました。度に展示されていた芸術物はとても見ることができて、感動しました。それから、岡本太郎が制作のために使っていた部屋を見ることができたので、初めて入った瞬間、他の展示スペースは空気が一気に変わり、その時の私は自分の芸術に対する考えで悩んでいた頃で、その部屋に入った時はなんと、岡本太郎に説教された気分になり、そこから悩んでいたことも少し前向きに考えることが出来るようになった。この時の気持ちは一生忘れられないくらい強く思います。近代美術館は私が若見沢に引越す前とても通っていたこともあり、よく行っていました。近代美術館での展示でとくに思い出に残っているのは、クリムト、シャガール、大原美術館、ゴッホ展です。どれも色の濃い展示会でしたが、場所は同じ近代美術館で、それとこれとよく分けて見られる展示されていたことのおかげで、全体の印象が残っています。

(続けて裏面に書いても良いです)

近代美術館の近くに住んでいたのは中学2年生から高校卒業
までの約5年間でした。そしてなほ、見逃してしまつた展示会もあるの
で、もっと足を運んでおけば良かったなと思つてゐます。そして、新国立
東京美術館に初めて行ったまゝおけば独立展でした。初めて行つ
たのは2年前で、昨年は私も独立展に出展して入鑑までいくことが
でき、新国立東京美術館というとても立派な場所に私の絵をのいて
もらつたが、そこで私が感じたのは虚しさでした。それは私がまだ
未熟だからというのもありますが「何れ月もかけて描いて、才氣と想像力を
ぶつけて描いた作品がこんな風になつて並べに置かれてしまふんだ、背
景と何々をいれようとした」というのをいふと感心しました。とても悔
しかつたです。それでも「だから私はいかに自分の想像力をいかに
まきりぶつけて作品を作つていこう」と思つてゐます。寺田倉庫の7000と
いう所では、歌手の「ロバート・ホワイ」が亡くなった時の大回顧展が行
きました。ハットを付けて、テレビでホワイの曲を聴きながら彼が
着ていた衣装や、彼が描いた絵、作詞の紙などを見て回れると
いう特許の展示会でした。テレビでホワイが最も勢いのあつた時代
に私は生きていませんが、高校生になつたときに彼のファンになり、ファンになつた
とわづかに感じましたので、悲しかつたのですが、この時の大回顧展を今
思い起しても、彼のカリスマや力強さを少しも失ふことができた
ので、この記憶や喜びなどは大切にしたいと思つてゐます。

以上が、私の美術館体験です。これから新たに世々の美術館
に行き、深山の美術展を見てとどろく深山の感性を身に付けて
いこうと思つてゐます。

私の美術館体験

手書きする

提出日： 月 日

学生番号

8 2 1 7

氏名

岡ニル

美術館名
いくつでも

北海道立近代美術館 ミュジパ展 ハリの夢 モラウリアの祈り

一行目

私が今まで見に行った美術館の展示の中で最も印象が強かったのは2014年北海道立近代美術館で行われた「ミュジパ展 ハリの夢 モラウリアの祈り」です。私をはじめ自分から「行きたーい」と思った展覧会です。私の家では母が絵が好きなので家族でも美術館に何度も行っておりそれが当たり前だと思っていたので特に自分からこの展示を見たい、なと思ったことはありませんでした。しかし中学校の教室にはられたミュジパ展のチラシがあまりにも色鮮やかで素敵で、はじめて「見たい」と思いました。

ミュジパの絵には私の好きなものがばかりが描かれていて驚きました。特にホースターの絵は難しいメッセージや理解するためには教養が必要な表現は少なく、わかりやすく明快に美しく何もわからなくても楽しんで、とても新鮮に見えました。絵は教養のある人たちが難しいテーマやメッセージをこねくり回して鑑賞するものだと思いましたがただ単純にきれい、というそれだけを楽しみ、そういう見方もあったとわかって嬉しかったです。

また展示としても絵だけではなくアクセサリーや42コの民族衣装、写真などがありミュジパや当時の世界が身近に感じられ、とても面白かったです。

私はそれまで絵は好きだったけれどミュジパの絵を見てはじめて「この世界に近づきたい」と思いました。近づきたい、という思いが一番だったのが画家になりたいとか同じような絵を描きたいとは思わなかったし今も思いません。ただきれいなものが好きで、その世界の中はにいたい、という気持ちです。ミュジパについての本を読んだりくうらに美術史にも興味が増えたりし、世紀末ハリが大好きになりました。ラカムやテラック、ニールセンが好きになったし、ワイルドなど小説や詩の教養もつきました。ミュジパ展に行かなかったらこんな世界はなかったかもしれないし、自分が好きなものに気付くのがもっと遅かったかもしれない。北海道でミュジパ展が行われたことに感謝しているし、「見たい」と思った自分もよくやったし運が良かったなと思います。展示室中が色鮮やかで綺麗な女性たちと花が100はりの世界で夢のようで、それに近づきたくて今でも絵や美術史をやったり、学芸員資格を取ろうとしていたりしているのとこの展覧会でも人の人生を変える大きな力があると感じます。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 1 8

氏名

寺山 留菜

美術館名
いくつでも

芸術の森美術館、道立近代美術館、国立西洋美術館

一行8

私が最初に美術館に行ったのは高校に入学してからです。部活動が美術部ということもあり、いろんな美術館、展覧会に見に行っていました。1つ目は芸術の森美術館では、「歌川国芳」展を母親と見に行きました。国芳の浮世絵をメインに数多くの作品が展示されていました。国芳は猫が好きで猫づくしという題名で、国芳が描いた猫たちが多く展示されていました。他にもユニークな発想と浮世絵を組み合わせた作品が目立っており、「猫の当字 ぶく」というタイトル通り、猫を文字に当てた面白い作品などがありました。私が好きだったのは、金魚を人に見立てた「金魚づくし物語」シリーズが興味深く、国芳の画風がわかる作品となっていました。どの作品も、ジャンルをどれ選んでも巧みな表現力と画力で、見応えのある展覧会でした。芸術の森美術館には毎年多くの展覧会が行われており、館内もとても広く見応えのある美術館であると私は感じました。2つ目は道立近代美術館です。この美術館には一番多く足を運んでいる場所でもあります。この美術館で見に行った展覧会は「ホーラ美術館コレクション」です。ここではモネやピカソ、シャガールなどの一度に有名な画家の作品を見ることができました。モネ作「睡蓮」や「ジヴェルニーの積みわら」などが展示されていました。他にもゴッホの「ひまわり」などといった数々の作品を見ることができました。時代と共に画家たちの画風にも変化していく様子がわかりやすく配置されており、教科書で見た作品を実際に見ることができ大変面白い展覧会でした。また、他にも去年は「ゴッホ展」にも足を運びました。ゴッホ自身の自画像であったり、「ひまわり」は物論、「アレルの寝室」など多くの作品が飾られていました。特に印象的だったのは「花魁」です。日本の花魁を油彩で描かれたゴッホらしい描写と日本美術に大きな影響を受けていたのがわかる作品で良かったです。道立近代美術館では一度に二つほど展覧会を開催しており、広さも大きく私にとって美術作品を見て学んでくれるのに最適な美術館となっています。3つ目は国立西洋美術館です。これは高校2年生の修学旅行で自主研修にて行った美術館です。外には立体造形物が多く並んでおり、ミケランジェロなどの作品が置かれていて広々と観ることができました。日本内では縁に囲まれて作品を見るところは中々少ない経験だと思います。室内は通常展示から数多くの作品が展示されています。室内は少し暗めで作品に合わせて明暗されており、じっくり見やすい印象でした。更に広い空間の中に展示されているので、近くでも少し離れて作品全体も観ることができてその点も非常に良かったです。かなり敷地が広いので、一度に観られる作品の種類も多く、たくさんの画家さんの作品が観られて楽しかったのと同時に自分の美術作品に取り入れるのにもしやすい場所かと思いました。他にも期間によって展示会が行われており、文化の日などは入場無料にしたりしますので一度は行ってみても良いかと思いました。私もまた機会があった際は行きたい美術館です。

(続けて裏面に書いても良いです)

現在他に行ってみたい美術館は、近場だと小樽美術館であ
今は浮世絵展も行っているので興味があります。今風のイラストも良いですが、
日本の古い感じの外国では出来ない独特な画風と発想力を活かした浮世絵を、
多数の画家が描いた作品を見比べて見る事ができる機会なので、行ってみたい
また外国のルーブル美術館などにも足を運びたいです。
教科書でしか見られなかったものが、裸眼で見られることは数少ない機会です。
私はルーブルなどの作品が好きなもので、展覧会だけでなく、本場に行って
作品を見ることで、本来の作品が持つ圧倒的な存在感、インパクトが味わえる
と思っています。他にも教科書では載らない知らない作品も多く存在すると思うので、
美術館に行ってみたいです。美術館によって作品の展示のされ方であったり、
雰囲気も異なってくるので、そういった意味で美術館の個性というものが出ている
のかなと感じます。美術館はどれも同じのように見えてそうではないと理解した上で、
いろんな美術館を見ることも面白さの一つのように感じます。作品もレプリカだけで
なく本物を見たリ、造形物の存在感に圧倒されながら紙では感じられない
伝え方ができるということが、美術館へ足を運ぶ楽しさを教えてくれるものだ
と考えます。だから、また行ったことのない美術館へあごく行ってみたいです。
また、興味のある展覧会があればまた寄ってみたいものです。

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 1 9

氏名

加藤 璃花子

美術館名
いくつでも

教育大旭川校春季書作展

一行目

4月に書道研究室の先輩方と、旭川校書道研究室の書道展を見に行きました。私達が行く時は107カーマンスをしている際中でした。音楽を流しながら数人の方がそれぞれ1作品書いていた。最後に出発した。1作品を見た時に、やはり立ちながら音楽のリズムに乗って書いていたのが、線に勢いがあり、生き生きしているように感じました。また旭川校の先輩が書道107カーマンスは約60年前に始まったと仰っていました。私は最近まで新しい物だと思っていました。107カーマンスを見に行った後は展示作品を鑑賞しました。私に今取り組んでいることか、大きいサイズの作品が77と、とても圧迫感を感じました。また、作品の内容も小さい字が沢山の書かれている系統、相反物や、逆に大胆に大きく墨を飛ばして書いている物もあり、観たに驚かされました。その中で私に印象に残った作品が、「造像記」という石に刻まれた文字を臨書した物です。1年生の方が書いた作品だったので、造像記の特徴がある力強く鋭い線が表現されています。一目で造像記だとは分かる作品だと思いました。何より、とても上手だったので、一番印象に残っていると思います。私も今造像記の練習に取り組んでいるので、今回見た作品のような素晴らしい作品が書けるように、一生懸命練習したいと思います。作品を鑑賞する時に17時20分、旭川校の方々とお話しすることができました。作品制作の方法などをお互いに話し合い、好きで言葉と話しました。今回の展覧会では様々な種類の書道作品に触れることができて、とても刺激を受けることができたので、今後の機会があればこれからの積極的な足を運ぶ予定です。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 0

氏名

中島 明日香

美術館名
いくつでも

札幌芸術の森美術館

一行目

私の実家は自然に恵まれた緑豊かな所にありました。周辺には、美術の大学があるから、「札幌」は地区は芸術的だと思います。なので、当然美術館も近くにありました。私は学校の行事で、両親と一緒に、よくその美術館に行っていました。「美術」に関してはとても不自由な学習をしていたと思います。何回も美術館に行くと分からずから、様々なことを学び、とても記憶に残るものがありました。「芸術の森美術館」。友人にどこに行きたいのかを大まかに決めた時、よく「芸術の森の近く」と答えた。そのころ、札幌の郊外で居る場所でした。芸術の森美術館に初めて行ったのは小学校一年生の頃から大分前だと思います。よく小学校から歩いて向かっていたのを覚えています。徒歩約20分。美術館に入館前からとてもワイルドな感じが遠足気分で行かれました。芸術の森美術館には、広大な土地に自然豊かな場所を活かして、森の中にさまざまな面白い作品があり、しずみの中を歩いて歩いて、作品を見て回っていました。野外美術館です。特に印象に残っているのは、「椅子にはいて休む」という作品です。黄色い色をした人がほとんどで、中には人がつらいついて座っている作品です。小さい頃は、この作品を見ては自分もマネしていました。とても記憶に残るものでした。この野外美術館は、75x79mの敷地に約74点の作品が芝生上や木立の中にゆたかに設置されています。作品のとりこで寝ることもできたり、お弁当を広げたり、触れてもかまいません。思い思いの作品に接するのからできるのが大分魅力的だと思います。冬には無料で貸し出しているかきじまを履いて、真の自分世界の中、かきじまが作った作品と出会うことができます。他にも工芸館があったり、クラフト工房があったり、佐藤忠良記念子どもアトリエも私の中で大分思い出しています。ワークショップがあり、当時の私は、粘土で自分の靴を作りました。今でも実家に飾ってあります。自分の顔を作ったり、中学の頃は本格的なお皿を作った。当時作ったお皿は今でも使っています。思い出せばたくさんあります。そのうち、とても大切なものでした。今の私がいるのは、芸術の森美術館で過ごしたことを学んだからだとはいっても過言ではないです。ぜひ一度、足を運んでいただきたいと思います。

(続けて裏面に書いても良いです)